

◀ ヤング頑張ってます ▶

サードエンジニア

日本郵船株式会社 新宅 健人

皆さま初めまして。2015年日本郵船株式会社に入社しました。二年目の新宅健人と申します。現在は三等機関士として船務に励んでおります。

この度「ヤング頑張ってます」の執筆依頼を受け、一読者であった私がこのコーナーに寄稿させて頂くこととなり感慨深い気持ちとなりました。また、何について書くか悩み、月並みですが自己紹介、そして入社後から三等機関士として1隻乗った現在までを紹介させて頂ければと思います。

未熟者ですが、お付き合い頂ければ幸いです。

自己紹介

生まれは兵庫県宝塚市、その後奈良県にある中学・高校へ進学しました。いずれも海とは無縁の山ばかりに囲まれた場所で暮らしており、大型船を見たこともありませんでした。

そんな私は神戸大学海事科学部へ入学し、小中高と続けていたサッカーを辞め、カッター部へ入部しました。このカッター部が船乗りという職を選ぶ転機だったと振り返ります。

この部活に所属しての生活は何かと「船」を意識させられました。大学所有の練習船深江丸の綱とりをカッター部だからということで協力。学校湾内に付ける場所を巡っての実習船白鷗への配慮。練習海域にいつも停泊しているばら積み船やPCC。船乗りとして働かれている諸先輩方のお話。気が付けば船乗りが私の中の普通となっていました。

入社1年目

社会人となり、初めての社船での実習。この実習ではコンテナ船、LNG船の2隻に乗船し実職をとるための下積みを半年間経験しました。

学生のころ乗った航海訓練所の練習船とは比べ物にならない、大きなエンジンに困惑しつつも感動したのを今でも覚えています。

また、社船の取扱説明書や資料は英語で記載されているものが多く、慣れない英語を読み込むのに普段の倍以上の時間を費やしました。さらにフィリピン人船員が多く、彼らとのコミュニケーションは私にとって戸惑いの連続でした。特にエンジン・ルーム内でのトランシーバーを使った連絡は未知そのものでした。速く、訛りのある英語で捲し立てられ、そしてエンジンの音も反響するので復唱することさえ難しかったのを覚えています。

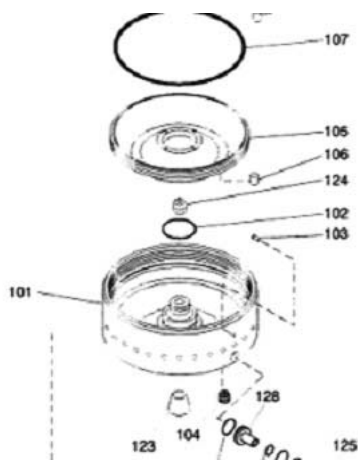
入社2年目（親船乗船）

就航して1か月余りの新造船（自動車専用船）に乗船しました。新造船ということで周りから羨ましがられましたが、逆に私は不安になりました。

何故なら駆け出しの私はまだ船での普通が分からなかったからです。過去の参考資料が船には無く、見たこともない書類の山を一つずつ新品のファイルにファイリングしていく作業は正解が分からず疑心暗鬼になりました。ただ幸いなことに次席三等機関士の私は、先輩の三等機関士の方に1から100まで聞くこ

とで何とかキャッチアップできました。先輩の仕事を見逃すまいとずっと付け回り、なかばストーカーのようになっていたと思います。今振り返れば、多大なご迷惑をお掛けしたと思います。

また三等機関士に繰り上がった後も、たくさん失敗しその中でも印象的だったのは、油清浄機の分解清掃をした際、回転胴のD-ring(メーカーNo102)を捻じて入れてしまい、それに気づかぬまま途中まで組んでしまったことです。作動テストでミスに気づき、途中でやり直すことが出来ましたが、些細なミスが機械を傷つけてしまうだけでなく、余計な仕事まで増やしてしまうのだと学びました。この些細なミスを生まないように、丁寧に一つ一つの作業に取り組みたいと思った一例でした。



(MITSUBISHI SELFJECTOR 取扱説明書より)

船の仕事は過密なスケジュールや突発的なトラブルにより、先が読めず苦勞することが多かったです。ただ、幸運なことに世界一周航路に従事することが出来ました。開通して間もない「新パナマ運河」を超え、アメリカ東岸、ヨーロッパを回った後、「スエズ運河」を通り中東に寄り帰ってくるといった航路でした。

新パナマ運河はジャングルの中を通るので、

夜の当直に入る際、真っ暗中で煌々と光をたっているエレベータ前には、見たこともない虫がびっしりと張り付いていました。あれは恐怖でした。

スエズ運河では、一面砂漠の中を1本の運河が通っており、今まで見た景色の中で一番新鮮な、幻想的な風景でした。こんな景色、経験を1隻目で得ることができた私は幸せ者だと思います。

周りの方の親切な支えに助けて頂き、なんとか7か月の乗船期間を終えることが出来ました。支えて下さった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。



(新パナマ運河通狭前)

最後に

私の稚拙な記事を最後まで読んで頂きまして、誠に有難う御座いました。

船の仕事は、周りの人の支え、協力があって初めて成し遂げることの出来る仕事だと思います。また、正しい知識を持って作業に取り組むことが、機器の維持を助け安全運航に繋がると思います。

日々の感謝を忘れず、自己研鑽を怠らず、一日一日職務を全うしたいと思います。

最後になりましたが、諸先輩方におかれましては、どこかでお会いした際は、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。